セッションII　西洋に響く能 ―移行・翻訳・解釈
【総括】

戸　谷　陽　子*

本シンポジウムの目的は、19 世紀末以降、西洋の数多くの作家や芸術家、研究者を魅了し、その作品、研究両面に多くの影響を与えてきた能の、西洋における受容と能研究の歴史をふまえつつ、現代の能の東西交流の実例を検証し、移行・翻訳・解釈といった点から、現代における能の東西交流を多角的に考察するというものである。とりわけ、このシンポジウムセッションでは、海外における能研究の成果に加え、舞台芸術としての能の上演実践にも焦点が当てられ、能が現代芸術に与えるインスピレーションを具体的に検証し、生きた芸術様式として進化し続ける能を深く理解する刺激的な機会となった。

シンポジウム冒頭の公開講演会では、法政大学名誉教授の西野春雄氏が、西洋における能の受容の歴史を紹介しつつ、19 世紀末から 20 世紀にかけて、モダニズムの先駆けとして多くの実験的な作品を残した W.B. イェーツ、ポール・クローデル、ステファヌ・マラルメ等英仏の作家が、熱心に能の理解を試み、深くインスピレーションを受けて制作した作品が、日本人により逆輸入された形で日本の能に翻案された興味深い例を報告した。西野氏はまた、クローデル作詞・オネゲル作曲のオラトリオ「火刑台のジャンヌ・ダルク」に想を得て自身が執筆した夢幻能の最新上演 (2012 年 5 月、フランス) についても報告した。日本から発信された能が、西洋の演劇に影響を与え、それが新たに日本における能を刺激し発展した能の東西交流の経緯が、制作過程とともに明らかになる貴重な報告であった。

次に、ロール・シュワルツ・アレナス本学大学院准教授により、本シンポジウムの趣旨説明として、西洋における能の活発な受容と東西のインターカルチュラルな交流について考察する際に考慮すべき今日的な問題系の枠組みが提示された。

これを受け、モニカ・ベーテ元大谷大学教授は、自らが講師をつとめた３日間の外国人のための能装束ワークショップについて報告し、また、外国人による海外所蔵の能装束のコレクションの特徴を紹介しつつ、その傾向を分析した。能装束は、能楽の美的な側面を際立たせる要素であるばかりでなく、象徴的な能の意味体系を補完する重要な役割をもつ。役柄の性格や年齢、地位や職業、季節や曲全体の雰囲気や背景までをも表現する能装束は、外国人にどのように理解されるのか、能の表現はどこまで普遍的な面をもち、文化の知識がない外国人にはどこまで理解が可能かという問いに、答えは人によりさまざまであるとしつつ、ベーテ氏のワークショップの報告はひとつの明確な答えを伝えていたように思う。能装束の織組織や技法、歴史的な発展、色、文様、仕立ての組み合わせ等を実際に体験し、さらに着付け方法も体験するこのワークショップの様子からは、作り手、鑑賞者、演者といった観点から多角的に能装束の理解を試みるという方法論が明確に見てとれ、能装束に文字通り接近する体験を提供していたといえる。

フランスを拠点に活動する現代音楽作曲家の馬

＊お茶の水女子大学大学院准教授

場法子氏は、制作過程をたどりつつ、自作「共命之鳥」の演奏を解説して論じた。シテ方能楽師と二人の打楽器奏者を擁した西洋音楽の範疇には存在しない、能楽ならではの特徴―強吟（つよぎん）や摺り上がり、謡手のジェスチャーにいたるまで―をとらえ、それらを西洋音楽の記譜法を用いて構成したこの作品は、かえって能楽の特徴を明確に浮彫にし、日本古来の伝統芸術である能楽が、コンセプチュアルな現代芸術に見事に生かされていることを印象づけた。

能の研究者ジャニーン・バイチマン大東文化大学教授は、1983年に発表し、つくば万博で初演された自作の英語新作能*Drifting Fires*（「漂炎」大岡信訳）を解説しつつ、能という形式を別の言語・文化に移植する試みについて考察した。祭儀としての能の側面に着目し、シテとワキの関係にフロイト的な解釈を加えた「限りなく能に近く遠い」とバイチマン氏が形容するこの新作能は、金春禅竹、F・G・ロルカ、シェイクスピア、柿本人麻呂、紀貫之等古今東西の作家やユダヤ教の教えの引用等、高度にインターテクスチュアルなこの作品となっており、開かれた能の可能性について考える上でたいへん興味深かった。

京都で狂言を上演する能法劇団を主宰するジョナ・サルズ龍谷大学教授は長年日本に在住し、バイリンガル狂言の公演に挑戦してきた実践家である。サルズ氏は演出家・翻訳家としての実践経験から、文化的な特徴を内包する狂言テクストの音韻的な側面や発声法の違いに注目した自らの翻訳の取り組みについて報告した。日本語の擬音語・擬態語を無理なく組み込む英語テクストと、ジェスチャーを伴う上演テクストが、英語でありながら、狂言として上演に立ち上がる様相から、日本語だけでも英語だけでもないハイブリッドな上演を可能にしていることが確認され、越境する狂言の可能性を感じることができた。

リチャード・エマート武蔵野大学教授は、英語能の劇団シアター能楽を主宰し、また外国人を対象にした能の実技訓練ワークショップを東京、アメリカのペンシルヴァニア州、イギリスのレディング等で精力的に展開している能の指導者である。ロンドン、パリ、ダブリン、北京、香港など、世界各地で英語による能を上演してきたエマート氏は、過去の上演を解説し、伝統的な能により近い形―囃子、面、装束、能舞台―での英語新作能を上演している様子を報告した。

いずれの発表者も研究者であり、かつ実践者である。視聴覚資料も豊富に提供され、豊富な知見と実践に基づく説得力ある充実した各発表をもとに、最後に会場からの質問を交えて行われたパネルディスカッションでは、上演についてのきわめて具体的な質問が寄せられた。また、多くの聴衆が、実際に上演を見たいと述べている。

能がジャポニズムへの関心という契機を得て西洋に紹介された19世紀末から100余年を経て、グローバル化が進む今日、情報伝達や交通手段等の物理的な条件は整備され、海外における能の研究や海外公演、国際文化交流は飛躍的に発展した。とりわけ近年のインターカルチュラル理論の展開により、異文化や「他者」に対する興味や異国趣味、美学的な関心のあり方は変更を迫られてきた。同時に、きわめて特殊なそれゆえ「他者」が入り込む隙のない日本固有の伝統文化として強調されてきた従来の枠組みももはや無効となったことは明らかである。こうした状況に、研究・実践両面から精力的に応答を続ける発表者の実践を目の当たりにし、多様な能のあり方をあらためて実感できたシンポジウムであった。能という日本古来の伝統芸術を、グローバルな空間で、いかに研究・翻訳・実践し、伝えてゆくかという問題はまた、国際日本学という学術分野のあり方や方向性を考える際に深く通底する問題であることもまた確認された意義深いシンポジウムであった。